



TITLE:

<図書紹介>梅棹忠夫,「東南アジア紀行」,中央公論社,1964,374p.

AUTHOR(S):

荻野, 和彦

---

CITATION:

荻野, 和彦. <図書紹介>梅棹忠夫,「東南アジア紀行」,中央公論社,1964,374p.. 東南アジア研究 1964, 2(1): 133-133

ISSUE DATE:

1964-09

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/54903>

RIGHT:

ほとんど見当たらない。著者は常にマラヤ全体を意識し、マラヤの政策と経済と社会を国の全体的な統計を引用しつつ論じている。その意味で人類学の常識を遙かに越えた書物で、むしろマラヤの政治家やマラヤに投資せんとする資本家の好参考となるかと思われる。

勿論評者にとっても、マラヤについて本書から教えられるところは多々あるし、マラヤをよく知る者にでなければ書けない著書であるけれども、資料の集め方や基礎的な調査にそれ程の努力が払われていないのではないかという印象をうけざるを得なかった。

(マラヤにて、棚瀬襄爾)

**梅棹忠夫：「東南アジア紀行」中央公論社 1964. 374p.**

現在のベトナム、ラオスにおける政治的な不安定さは、著者らが1957年から58年にかけてこころみたようなインドシナ半島全域にわたる広汎な旅行を、一般にはほとんど許さないであろう。当時、反日的である、国情が不安定であるなどといううわさを耳に、緊張してカンボジアからベトナムに入ったとき、それらの不安は一掃され、あちこちで人々の歓迎と協力をうけたという。北ベトナムとの停戦ラインちかくを、ラオスへ山越えするのは、勇気のいることであったろう。「やってみることだ。ベトコンにつかまったら、それも一つの経験だ。」という度胸は賞賛にあたいする。不安にもかかわらず、綿密に計画をたてる。ルートをさがし、情報をえる。ビザの期限にまで気をくばって、サイゴンを出発したときには、同行者をえている。ラオス国境に達する。哨兵の「ササゲ、銃」の礼とともに遮断機がスルスルとあがる。悠揚せまらず答礼してとおります。とラオスであった。なにかトリックをつかったかのようなのだが、実は出国手つづきも、税関検査もすんでいないことを気にしているのだっ

た。ラオス国軍の国境警備屯田兵が旅券の検査をすませたとき、「ところで、あなたがたはこの国の人か」ときいた。一行は、心のそこからおどろき、兵士たちが文盲であることをしる。けれども、これっぽちも兵士たちを軽蔑したりはしない。逆に兵士たちの旅行者に対する親切さと、善意を理解するのである。

ラオス人やベトナム人は、国のなかでたたかっている。北ベトナムの鉱産資源、南の農産物、勤勉な国民の能力があるにもかかわらず、南北分裂はすべてをさまたげている。著者のなげかけた疑問はまだ解決されてはいない。

著者らのはじめての調査旅行、1957年に日本政府があたえた外貨枠は1人1日4ドルであった。テープコーダーと銃を輸入するのにタイ政府税関では、1か月の期間を要した。バンコックを出発する日、ゆううつよさようならとよろこびいさむのだった。いわゆるタイ通のいう「タイの旅行は、おなじ景色ばかりでつまらない」に反撥し、広大な景観が、雄大に変化するのを、自らの目でたしかめ、かぎりない満足をおぼえる。

移動図書館と名づけ、必要な文献を車にもちこみ、観察したことを正確に知識として整理しながら旅行はつづけられた。

人間に対し、かぎりない愛情をもちながらも、冷静な被観察者となりうること、慎重に、そして大たんにことをはこぶなど、著者のフィールドワーカーとしての態度にはまなぶべき点がおおい。

旅行中の経験や観察をならべたものでなく、著者の解釈や考えかたを述べ、各国の歴史にもふれるなど、たくみな紀行文でおもしろく読ませながら、現在世界的な注目をあびるインドシナ半島をうきばりにしている。欲をいえば、著者が参照した文献の解説のようなものがほしい。地域研究を志すものならば、いちどは目をとおしておきたい。

(荻野和彦)